

# アメリカ国立公園のインタープリテーションと インタープリターについて

親泊 素子\*

## はじめに

アメリカのインタープリテーションの第一人者といわれるフリーマン・ティルデンをもってして、「私はインタープリテーションの概念について25年近く携わってきており、多少の考えを得て、その定義についてもいろいろ書いてきたつもりだが、いまだにそれがどういうものであるかがわからない」(Tilden 1957)と言わしめたように、インタープリテーションの概念を一言で定義するのは難しい。また、アメリカのナショナルインタープリテーション協会のウェブページで「インタープリテーションとは」の定義を検索してみると、世界各国のインタープリターがそれぞれ自分の定義する「インタープリテーション」について動画で語っているが、天然資源や貴重な遺産の大切さを教えるというものから、過去の過ちを現在の人間に伝える、自然の不思議さ、面白さを理解させ、そこから自然保護の気持ちを育てるといったものまで、かならずしもまとまった定義を述べているわけではない。しかし、それぞれのメッセージに共通していることは「インタープリテーションは単なるメッセージではなく、その背景にあるものを伝える」ということである。

さて、日本におけるインタープリテーションの普及はどうかであろうか。残念ながら日本においてインタープリターというと一般的には言語の通訳をイメージされることが多く、ましてや日本の国立公園にはアメリカでいうところのパークレンジ

ャーのインタープリターはほとんどいないか、いってもインタープリテーションをやる暇がないようである。また観光ガイドとインタープリターの違いも理解されにくく、さらに日本ではエコツアーガイドや森林インストラクター、自然観察指導員と呼ばれる人たちもおり、そういう人たちの仕事との区別もあいまいである。さらに、日本ではインタープリターを「自然解説員」と訳しているため、その訳語からくる誤解もある。アメリカの国立公園体系には自然遺産だけでなく文化遺産や歴史遺産も含んでいるため、国立公園でインタープリテーションをするということは自然解説だけでなく歴史、文化の解説活動も含まれるのだが、日本では自然保護を中心とする国立公園の中で紹介されたために、自然解説員と訳されてしまっている。しかし、日本の国立公園内には自然遺産ばかりでなく、社寺仏閣などの歴史的建造物や貴重な文化遺産も存在しており、これらの大切な遺産の解説も含まれなければならない。

そこで、本研究は過去に2回のワシントンD.C.への現地調査を通して、アメリカ国立公園局のインタープリテーションプログラムの歴史的背景とその発展について調査した結果をもとに、アメリカのインタープリテーションの特色とインタープリターについて多くのインタビューを通してまとめてみた。

## 1. インタープリテーションの歴史

インタープリテーションはいつ頃から始まったのだろうか。インタープリテーションによるビジター教育は国立公園の目的の一つであり、自然

2014年11月30日受付

\* 江戸川大学 現代社会学科教授 環境政治学

を保護する上で大事な役割を担うものである。しかしこのインタープリテーションがいつ頃からどこで誰によって唱え始められたかについての定説はない。オーストラリアのインタープリテーションの歴史の中には国立公園制度ができる以前にアボリジニたちによってその土地の歴史や文化が口承されてきた行為もインタープリテーションであるとも言われている。コミュニティインタープリテーションの専門家のミシガン州立大学の G. J. シュレーム 教授も昔からコミュニティに伝わる話に対して同じような解釈を述べており (Cherem 1991), そういふ点から考えると, 日本でも各地に伝わる民話, 童話, 各地の迷信, 風習等が地域の人々によって語り継がれてきた行為もインタープリテーションと言えなくもない。要するにインタープリテーションはコミュニケーションの手段であり, どんな手段を特にインタープリテーションと呼ぶかは個々の定義に委ねられている。

国立公園についていえば, アメリカでは, インタープリテーションプログラムは国立公園の目的を果たす大きな役割を担ってきた。我が国においても公園管理にインタープリテーションが重要であるという認識は近年特に高まり, エコツアーの発展とともにその需要も伸びてきている。また環境教育や自然とのふれあいを推進するためにはインタープリテーションによる教育活動は欠かせないものであり, 環境教育の研究者, 専門家, 自然保護活動実践家等が諸外国の例を研究し, また自分たちの活動をふまえて独自のプログラム等を作成, 実施しているケースも増えてきている。

## 2. アメリカのインタープリテーションの先駆者たち

アメリカの国立公園には2つの目的がある。人々が国立公園を楽しむレクリエーション利用と貴重な生態系を守る自然保護である。そして, アメリカのインタープリテーションプログラムはその目的を遂行するための欠かせないものとして位置づけられてきた。人々は国立公園を訪れた時に

その国立公園について理解し, 楽しみ, また十分堪能できるようインタープリテーションプログラムを利用する。また, インタープリテーションは訪れる人々が自然保護に貢献できるような場を用意し, またそれを伝える教育的責任を持つものとして位置付けられている。それではアメリカのインタープリテーションの発展に寄与した先駆者を何人かあげてみよう (U.S. National Park Service 2007)。

### (1) ジョン・ミューア (John Muir)

いうまでもなくアメリカで名インタープリターと言われているのが, アメリカの自然保護の父, ジョン・ミューアである。ジョン・ミューアはヨセミテ渓谷で生計を立てる一手段として初期の公園利用者やハイカーを案内していたが, ミューアの解説は人の心をとらえて離さず, またこれほど知識のある人間はいなかったと後にミューアの弟子が語っている。ミューアはこのヨセミテにいる頃にインタープリテーションの技術を磨き, また生態学やウイリダネスの生態系の構造等を理解し, ヨセミテに暮らしていた1871年に記したノートに「インタープリット」という言葉を用いている。すなわち, 「私は岩石をインタープリット(解説)し, 洪水, 暴風雨, 雪崩の言語を理解し, 氷河や野生の園と友になる。そしてできる限りその世界の心に近づきたい」と表現している。しかし, このミューアの表現はまだ自然とコミュニケーションするというより自然を理解するニュアンスであった (Mackintosh 1986)。

### (2) イーノス・ミルズ (Enos Mills)

ミルズはカンサス出身で, 結核にかかった時期にコロラドに移住した。15歳の時に14,255フィートのロングスピーク (Longs Peak) に初めて登頂した。その後, ミルズは40回以上もの旅をし, 300回以上のガイドも経験した。1887年に健康が回復するとモンタナ州のビュッテ (Butte) に移り住んだ。彼は1902年までアメリカ西海岸, アラスカ, ヨーロッパで多くの夏を過ごしたが, 彼の自然保護運動へのかかわりは, 偶然にもジョン・

ミューアとの出会いからだった。1889年にサンフランシスコの海岸を歩いている時に、偶然に通るかかった人物に海藻についての質問をしたところ、それがジョン・ミューアだったのである。この海藻についての会話から友情にまで発展し、彼はミューアに勧められ彼の探検の話を発表するようになり、自然保護活動にも携わるようになったのである。

1902年にコロラドに戻るとエステスパークにあるロングスピークハウスを彼のいとこから買い取り、そこを拠点として活動を始め、のちにロングスピークインを建設した。そしてそこに滞在するゲストに周辺のウイリダネスやネーチャーウォークの案内をした。ミルズはのちにアメリカで最初のネーチャガイド学校も設立した。1902年から1906年の間、彼はコロラド州の積雪観測員も務めた。その仕事とは雪の深さを測量し、春や夏に流れる水量を予測することであった。その後、1907年から1909年にかけて、森林に関する政府の講師を務めた。その間、自然やエステスパーク周辺についての記事や本を出版した。また、ミルズはロングスピークを国立公園にする運動も展開し、シェラクラブやアメリカ革命の娘達(Daughters of the American Revolution)の団体の助けも借りて、ついに1915年にロッキー山脈を国立公園にすることに成功した。彼は「ロッキー山脈国立公園の父」と呼ばれ、その後、1922年に52歳で亡くなるまで精力的に講演や執筆活動を続けた。現在のロッキー山脈国立公園のミルズ湖は彼の名前に由来するものである。ミルズは自然アドベンチャーガイド等、約20冊近い本を出版したが、今でもこれらの本はインタープリターに愛読されている(US National Park Service 2007)。

### (3) フリーマン・ティルデン (Freeman Tilden)

フリーマン・ティルデンは1883年にマサチューセッツ集マルデンに生まれた。若いころから父親の新聞社のブックレビューを書くなどの仕事を始め、高校卒業後はさらに、多くの記事を書くようになった。外国人特派員としても多くの国を旅し

て様々なトピックで記事を書いた。時にはフィクションや芝居などの脚本も手掛けた。こうした幅広い経験を持ちながら何か満たされないものがあり、それが国立公園に関わるきっかけに導いた。若い時から新聞社のコラムニストであり、作家でもあったのだが、彼が自分の生活を変えようと思い始めた58歳の頃に、友人だったアメリカ国立公園局局長、ニュートン・ドゥルルーに国立公園局で働くことを勧められ、そこで働くことを決心した。ティルデンはいろいろな国立公園を回り、職員やビジターたちと話をしたり、時には国立公園の職員に政策について助言をしながら、それらをもとに国立公園の意義と価値を、「国立公園：それらはあなたや私にとって何を意味するか」The National Parks: What They Mean to You and Me”という本にまとめ出版した(Tilden 1951)。また公園におけるインタープリテーションプログラムの質を高めることが必要であると思い始め、やがて1957年にインタープリテーションに関する「我々の遺産を解説する」“Interpreting Our Heritage”を書きあげて出版した(Tilden 1957) (US National Park Service 2007)。

### (4) グラント W. シャープ (Grant W. Sharpe)

シャープはシアトルのワシントン大学森林学部教授でアウトドアレクリエーションが専門だったがナチュラリストでもあり、5ヶ所の国立公園で16回の夏をナチュラリストとして活躍をした。また、専門家を20人集め、国立公園及び保護地域におけるインタープリテーションサービス及びその施設に関する「環境をインタープリテーションする」“Interpreting the Environment”という本を発表した。のちに彼の功績をたたえてナショナルインタープリテーション協会はグラント W. シャープ賞を設けた (Sharpe1982)。

### (5) ウィリアム J. ルイス (William J. Lewis)

ルイスは1980年に「パークビジターのために解説する」(Interpreting for Park Visitors)とい

う本を出版し、特別な種類のインタープリテーションプログラムをする時の実践的な知恵やガイダンスを提供した (Lewis 1980)。ルイスの本もティルデンの本同様、この分野の古典書としてパークレンジャー達に利用され、インタープリテーションの職業化に役立っている。またルイスはインタープリター養成やコーチングのパイオニアになった人物でもある。

#### (6) サム・ハム (Sam H. Ham)

サム・ハムはアイダホ州立大学天然資源学部資源レクリエーション&ツーリズム学科の教授で、かつ国際トレーニング及びアウトリーチセンターの所長でもあったが、彼は1992年に「環境インタープリテーション」"Environmental Interpretation" を出版し、その中でインタープリテーションが他のコミュニケーションと異なる4つの要素について述べている (Ham 1992)。これらの要素はまさに職業としてのインタープリテーションについて言い当てているといえよう。それらの4つの要素とは

- ①インタープリテーションは楽しくなければならない
- ②インタープリテーションは適切でなければならない
- ③インタープリテーションは良く整理されていなければならない
- ④インタープリテーションはテーマがなければならない

#### (7) ラリー・ベック (Larry Beck), テッド・T. ケーブル (Ted T. Cable)

この二人は1998年に「21世紀のためのインタープリテーション」"Interpretation for the 21st Century" という本を出版し、将来のインタープリテーションはどの方向に向かうべきかを著した (Beck & Cable 1998)。またミルズやティルデンの考えを元に、インタープリテーションの15の原則を打ち立てた。

その15の原則とは

- ①好奇心を持たせるために、インタープリターは

解説する対象をビジターの生活と関連づけて話すが良い。

- ②インタープリテーションの目的は単なる情報提供に終わるのではなく、その情報の背景にあるもっと深い意味と真実までもインタープリテーションのプレゼンテーションで語れるようにすることである。
- ③芸術作品としてのインタープリテーションのプレゼンテーションはビジターに伝達し、楽しませ、そして啓発する物語性をもってデザインすべきである。
- ④物語をインタープリテーションする目的は訪れる人々を啓発し、彼らの視野を広げてあげることにある。
- ⑤インタープリテーションは完全なるテーマや物語を伝え、全人格に働きかけるものでなければならない。
- ⑥子供やティーンエージャーやシニアや修学旅行の生徒たちへのインタープリテーションは根本的に違ったアプローチでインタープリテーションを行う必要がある。
- ⑦すべての場所には歴史がある。インタープリターはその場所の過去をより生きたものにして現在をより楽しませ、さらに未来をより意義あるものとする。
- ⑧高度の技術は世界をもっとも刺激的にするが、この技術を使う時にはより先の事に注意を払いながら利用すべきである。
- ⑨インタープリターは情報を提供する際には自分自身が知っている量と質 (選択と正確さ) に注意を払うべきである。焦点を定め、より正確に調べたインタープリテーションの方が長い話より力強い。
- ⑩インタープリテーションにアート (芸術) を適用する前に、インタープリターは基本的なコミュニケーション技術を持っていなければならない。また、質の高いインタープリテーションは途切れることなくインタープリターの知識や技術を積んでいくことである。
- ⑪書いて説明するインタープリテーションは読者が何を知りたいかを念頭に置き、知恵、気づか

い、心配りを持ってまとめることである。

- ⑫すべてのインタープリテーションのプログラムは、財政、ボランティア、政治、行政等から支援が得られるものでなければならない。どんな支援でもそのプログラムを成功に導くためには必要である。
- ⑬インタープリテーションは人々の精神を高め、資源を保護する気持ちをもたせ、彼らが徐々に周囲の美しさに気づき、それをさらに感じたいと思う気持ちにさせるものでなければならない。
- ⑭インタープリターは熟考したプログラムと施設のデザインを通して、ビジターが適切な体験をすることができるように努力すべきである。
- ⑮情熱は力強く効果的なインタープリテーションをするための大切な要素である。その土地の資源に対する情熱や、その資源によって啓発される人々への情熱である (U.S. National Park Service 2007)。

### 3. アメリカ国立公園のインタープリテーションの歴史

アメリカの国立公園におけるインタープリテーションは米陸軍の騎兵隊がイエローストーン国立公園に駐屯して国立公園を管理していた頃から始まったと言われている。兵隊たちはアッパー・ガイザー・ベイスンに駐留して、訪れるビジター達に間欠泉について説明をしていたが、科学的に正確な説明ができたわけではない。それでもビジターは兵隊たちによる解説を楽しんだようである。また初期のころはイエローストーンのホテルの従業員がガイドをしてチップをもらったりしていたようである (Mackintosh 1986)。

しかしアメリカ国立公園管理の歴史の中でインタープリテーションの役割が教育的目的を持って位置づけられたのは、1916年のアメリカ国立公園局基本法“National Park Service Organic Act of 1916”が制定されてからである。国立公園の父といわれるステファン・マザーは国立公園局が出来た一年後の1917年には、すでに資源インタ

ープリテーションの計画に着手し、自分の資産を投じて、カルフォルニアのヨセミテ国立公園で、野外観察を講義してもらうためのナチュラリストを雇ったと言われている。また1919年には、ステファン・マザーが鉄道での帰路、ヨセミテの環境が脅かされていることを杞憂しながらタホー湖のフォールンリーロッジに滞在したところ、そのロッジで開催されていたインタープリテーションに人気が集まっているのに気づいた。聞くところによると、このロッジのオーナーはスタンフォード大学で生物学の学位を取り、この自然解説や夜のネーチャートーク等のインタープリテーションがノルウェーのリゾート地で繰り広げられているのを見て、自分のロッジにも取り入れたと言うことだった。ステファン・マザーはこの方法によってヨセミテの天然資源の価値を理解してもらえるものと考え、翌年、早速ヨセミテとイエローストーン国立公園にナチュラリストの職員を配属し、アメリカのインタープリテーションが開始されたとも言われている (Mackintosh 1986)。

20世紀に入るとイエローストーン国立公園でテントの貸し出しを行っていたウイリーキャンプ会社が先生を雇い、レクチャーやキャンプファイアーのプログラム等をやらせた。この傾向が周辺にも影響を与え、のちにロッキー山脈国立公園となった地域ではミルズがネーチャーガイドの先駆けとなった。1905年にはアリゾナ州のカサ・グランデ史跡保護区(のちのカサ・グランデナショナルモニュメント)の管理官だったフランク・ピンクリー (Frank Pinkley) があたらしい形のインタープリテーションのパイオニアとなった。彼は史跡から掘りだした考古学的発掘物を修復してつなぎ合わせ、先史時代の古器物の見本として展示したのである。そのことから、ピンクリーは国立公園博物館の展示の先駆者と呼ばれた。また、その前の年にはヨセミテ国立公園に駐在していた第9駐屯隊のヘンリーF.パイプスが道に沿って36種の植物に名前をつけることを試みた。残念ながらその土地が個人の所有と分かり、のちにその展示は廃止になってしまった。また、それらと一緒に博物館や図書館の建設も計画されていたのだ

が、その計画はもろくも崩れ去ってしまった。ようやく 1915 年にヨセミテに博物館が建てられた (Mackintosh 1986)。

1920 年代に入るとインタープリテーションの企画立案方法や技術がすすみ、ますます高度化してきた。1930 年代のホラス・オルブライト (Horace Albright) の時代にはいと、歴史地区の保護に特に力がそそがれた。この時期は世界大恐慌からの不景気の時代が続いており、その打開策としてニューディール政策のもとに多くのパークミュージアムが建設された。1939 年までに国立公園システムのもとで、76 もの博物館が作られたのである。そのうちの三分の一は恒久的な建物の恒久的に展示されるものであった。1935 年にはワシントン D.C. の国立公園局に博物館部も新設されたのである。しかし、1940 年代、50 年代は国立公園の利用者の数が増加していったにもかかわらず、国立公園の利用サービスに対する施設等の整備が間に合わず、公園局はずっとその対応のまずさを非難されていた。

そこで 1960 年代にはいと、国立公園局設立 50 周年を記念したミッション 66 の取り組みを開始し、ビジターセンターやビジターサービスのインフラ整備をより充実させるための本格的なプロジェクトが始まったのである。多くのビジターセンターが建設されたのもこの時期である。また、リビングヒストリーの手法による博物館展示が始まったのもこの時期である。この 1960 年代はアメリカの新環境運動の時代とも一致し、国立公園のインタープリテーションも深くエコロジーに関係した環境教育にギアが切られていった時代である。1967 年から 70 年にマザートレーニングセンターの所長だったレーモンド L. ネルソン (Raymond L. Nelson) は特に環境インタープリテーションに熱心な人物であった。したがってこの時期は諸々の動植物の関わり合い、生態学、景観等についての解説がなされるようになり、これらは必ずしも特異なものについてだけ解説するものではなかった。これは公園管理全般についての関心が高まった結果だと思われるが、その解説の範囲はまだ限られており、公園及びその周辺にどん

なものが生息しているのかの解説にとどまっていた (Donaldson 1998)。

この時期に公園利用者が環境問題に関心を持つような教育をする傾向になっていった理由は以下の考え方からきている。

- (1) 国立公園は周辺の景観と切り離して存在するものではない。
- (2) 国の環境政策を支援するためのモデルや、基本原則を示す指針が国から求められている。
- (3) 国立公園は自然遷移のモデルを示すものであり、林業のような持続可能な資源利用が行われる景観と比較対照されるものである。
- (4) 国立公園の利用者は高い教育を受けた人が多く、それだけ環境教育を受ける素地を持っており、また政策決定にも大きな影響を与える人々である。
- (5) 人手での加わらない国立公園の環境は、新たな哲学や倫理観を生み出す可能性を秘めており、脱産業社会の価値観の転換を促し、新たな土地倫理を確立させる可能性を秘めている。こういった方向転換は長期目標であるが、将来の国立公園や環境全般の生態系のバランスを保護するために重要である。

このようにアメリカのインタープリテーションの基本原則である「教育」は 1916 年以来変わっていないが、それをどのような方法で行っていくか、またどのような目標を設定して行われていくかについては社会変動とともにそのニーズが変わってきた。1980 年代以降は、環境教育と同時に、「見えるものを通して見えないものを見る」“from tangible to non-tangible”，感性を磨くことにより自然の尊さを理解し、かつ普遍的な価値を理解し、自然や文化遺産を後世にまで伝えて行く思想が養われてゆくことを努力目標にした解説プログラムがつけられてきた (Donaldson 1998)。そして 21 世紀に入るとバックとケーブルが、ミルズやティルデンの思想をさらに補足した 15 の原則をまとめ、現在に至っている。

こうしてみると、アメリカのインタープリテーションは公園の特異な事柄や驚異的な自然を驚嘆

すべき神の創造物として説明していた時期、文化・歴史遺産を展示、説明するための博物館、ビジターセンターの施設整備に力を注いだ時期、リビングヒストリー等の方法でビジターに理解させようと努めたエンターテイメント色が強かった時期、そして環境問題を意識し、環境教育を強く念頭においたインタープリテーションを実践していた時期、そして、現在はビジターが普遍的真実に心を震わせられるようなインタープリテーションとはいかにというところでいろいろな議論が重ねられている状態といえよう (Fudge 1998)。

#### 4. フリーマン・ティルデンのインタープリテーション論

アメリカのインタープリテーションプログラムの根底を流れているのが、フリーマン・ティルデンの思想である。1957年に出版されたフリーマン・ティルデンの「我々の遺産を解説する」"Interpreting Our Heritage" は、インタープリテーションのバイブルと言われアメリカのインタープリテーションに携わるパークレンジャーは皆、この本を古典書として携えているが、1980年代以降の「見えるものを通して見えないものを見る」思想は、まさにティルデンのメッセージを思い起こし、忠実に実行しようとしたことに他ならない。

ティルデンのインタープリテーションに関する6つの原則はあまりに有名ではあるが、この原則の根底を流れているのが「愛」(Love)であり、資源に対する愛、及びその心を人々の間で分け合うことの大切さを説いている (Tilden 1957)。この6つの原則とは

- (1) ビジターの個性や経験に何かを訴えないようなインタープリテーションは無意味である。
- (2) インフォメーションはインタープリテーションではない。インタープリテーションはインフォメーションに基づいて真実を発見することである。この2つは全く異なるものであるが、すべてのインタープリテーションはインフォメーションを含む。
- (3) インタープリテーションは芸術である。これ

は様々な芸術が組み合わされており、その材料は科学、歴史、建築等であったりする。どの芸術もまた教えるものである。

- (4) インタープリテーションの主目的は知識の伝達ではなく、刺激を与え誘発することである。
- (5) インタープリテーションは全体を示すものであって、部分を示すものではない。またその人の全人格に向かって掲示するものであって、一部への掲示ではない。
- (6) 子供に対するインタープリテーションは大人に対するインタープリテーションの濃度を薄めたようなものであってはならない。根本的に異なったアプローチを取る必要があり、またその為の異なるプログラムも必要とされる。このようにティルデンは、インタープリテーションは単なる情報の伝達でもなく、公園内で見ること、やれることの行事、イベントの一覧を提供するものでもなく、ビジターが不思議さと好奇心で胸を躍らせるようにすることであると述べている。各個人が公園の資源をどれだけ感覚的に理解できるかによるが、インタープリターは公園についての解説をすることでビジターたちができるだけ感覚的にとらえ、更なる知覚を高められるようにする役割を担っている。その結果、ビジターと公園とのより良い関係が築かれるのであると述べている (Tilden 1957)。

#### 5. アメリカの国立公園におけるインタープリターの条件と資質

それでは、アメリカの国立公園において、インタープリターになるにはどのような資質が求められているのだろうか。アメリカ国立公園局ビジターサービス担当者に聞いてみると次のような答えが返ってきた (Donaldson 1998)。

- (1) 基本的には大学卒で関連分野の学士号を取得していること。例えば、生物、歴史、心理学、教育、ジャーナリズム、語学、造園等
- (2) 人が好きであること
- (3) アーティストである事
- (4) 文章力、表現力があること

- (5) 公園の特色、テーマ、そしてミッションを理解させる能力を持っていること
- (6) Whatではなく、whyの心を引き出し、それに答える能力
- (7) 感性と知性を引き出す能力
- (8) 有形なものを無形なものに昇華させる能力、そして、そこから、命、愛、死といった普遍的価値を導き出せる能力
- (9) 「自然を思いやる心」、「自然を感じる心」を引き出す能力、そして自然保護の心を理解させる能力、そして自ら管理する心を持たせる能力
- (10) その場所に触れ、実体験し、そして自然を敬愛する心を持たせる能力

また、アメリカの国立公園では毎年、その年で一番上手なインタープリターにフリーマン・ティルデン賞が授与されるのだが、1997年にティルデン賞を受賞したインタープリターに上手なインタープリテーションのコツを聞いてみると次のような答えがかえってきた (Arning 1998)。

- (1) 声大きい、ハキハキ話すなどの物理的効果もさることながら、何よりも一番うまい下手の決め手はその人の人柄そのものである。
- (2) 時として何もしゃべらないほうが効果的な場合もある。
- (3) 実体験を通した解説の方が迫力を感じてもらえる。
- (4) 対象となるビジターによっては手法を変えることはあるかもしれないが、自分のスタンスは変える必要はない。
- (5) オールラウンドである必要はない。何か一つ得意なものがあればよい。
- (6) 個性的なインタープリテーションは人の心に残る。
- (7) 少数を対象とした話し方の方が人の心を捉える。

確かに彼の言うことはもっともで、彼は歴史学で修士号を持っていると言うことで特に歴史が得意のようだったが、ワシントンD.C.で彼のインタープリテーションを聞いてみると、エイブラハム・リンカーン像の前では、リンカーンのゲティ

スバーグでの演説として知られる「人民の人民による人民のための政治」というメッセージについて解説をする時に、古代ギリシャの民主政から解説を始めた。また、フォード劇場でのリンカーン暗殺の解説では、リンカーンの暗殺の瞬間までを克明に説明し、ツアーに参加しないで個別で見学をしていた人たちが集まり始め、最後は人だかりの山が出来る程であった。知識の深さが大きく影響することを目で確かめた経験であった (Arning 1998)。

実際、公園内でのインタープリテーションをする時には公園の法制度や公園計画、土地資源管理計画をきちんと把握しておく必要がある。また公園の歴史、科学、公園資源等、正しい情報に基づいてインタープリテーションをすることが必要だが、アメリカの場合は何よりも第一の条件として「人を好きであること」をあげている。なぜならインタープリターが仕事をする対象はビジター達であり、人間嫌いではまず務まらない。また数多くのアメリカのインタープリターは笑顔をやささない。さらにジョークやアドリブをたっぷり入れる。ワシントンDCのフォード劇場のあるベテランインタープリターは、最初に挨拶をしながら、「出身は」と、次々にビジターのグループに声をかけながら、彼らがアメリカのどの州からやってきているかを瞬時に把握して、その州と関連づけながら解説を進めていた。また、別のベテランの女性インタープリターは、解説をしながら歌を交えていた。また、黒人のインタープリターはラップ調の調子のいい軽快な口調でインタープリテーションをしていた。聞いていると思わず踊りたくなるような雰囲気を作り出していた。もちろん若いビジターに大うけであった。若い新米女性インタープリターは自分のお父さんと同じような年代層に向かって、「My daddy is…」を連発しながらかわいらしく解説をしていた。どれをとっても大変個性ある解説で、これこそが個性的なインタープリターで心に残るインタープリテーションということになるのではないだろうか。したがって、インタープリテーションというのは特定のモデルや最高のモデルがあるのではな

く、自分がインタープリテーションを行う公園の知識、訪れるビジターのタイプ、そして自分の経験と個性、この3要素をうまくかみ合わせながら解説をするということである(親泊1989)。

## 6. 上手なインタープリテーション

ところでアメリカの国立公園におけるインタープリテーションプログラムについて研究をするきっかけは偶然のことから始まった。ワシントンD.C.の国立公園局に勤務するアメリカ人の友人が、ワシントンD.C.にはたくさんの日本人観光客が来て、国立公園局が管理する史跡やモニュメント等を見て回っているのだが、その時の日本人ガイドが果たして本当に私たちが伝えたいメッセージを説明しているのかがいつも気にかかる。できればそれを私に調査してほしいとのことであった。私はバイリンガルの学生を2カ月ワシントンD.C.に滞在させその調査をしたのだが、案の定、日本人観光客相手の日本人ガイドは、プロのインタープリターでもなければガイドでもなく、その中でも特にアルバイトで雇われている日本人ガイドは、多くの場合、かなり間違った情報を説明していることがわかった。そこでバイリンガルの学生にアメリカのインタープリテーションのトレーニングを受けさせ、2ヶ月目からは、アメリカ人のインタープリターとバイリンガルの学生とがペアで日本人旅行者の団体のそばに立ち、日本語ガイドの話と一緒に聞き、間違った説明をしている時には、アメリカ人のインタープリターが正しい説明をして、日本人のバイリンガルの学生が通訳をするということを試みたのだが、ほとんどの場合、「急いでいるので」とか、「時間がなくて」と言って断られたケースが多く、せっかくワシントンに来ていながら、間違った説明を受けて帰国する日本人観光客が気の毒であった。アメリカの公園局のレンジャーたちもとても残念がっていたが、日本人観光客もガイドによる説明とインタープリターによる説明の違いをきっと理解できていなかったのだろう。特に団体旅行の場合には、インタープリテーションプログラムに参加して、じ

っくりと何かを感じたり理解するところまで行くのは難しい。この辺にも日米の国立公園を訪れるビジターの意識の違いがみえてくる。

それでは、インタープリテーションのトレーニングを受けたバイリンガルの学生は、インタープリテーションをする際にどのように勉強すべきかを学んだのだろうか。彼はティルデンの「我々の遺産を解説する」という本と、ルイスの「パークビジターのために解説する」の2冊の本を読むように言われ、同時に以下の留意点を教えてもらったのである。

- (1) インタープリテーションを行う際に、ビジターにこの公園を訪れた時に何を心に残してもらおうか、そのテーマ(メッセージ)をしっかり持って始めることである。例えば、単にその樹木について説明するのではなく、その樹木がこの公園にとってどのように大切なものであるかを訴えられるかである。
  - (2) これから解説することについてのアウトラインを最初に簡単に話しをする。これはビジターの関心を引くための最初の出だしとしても大切である。例えば、「今日は植物について話します。」というよりは「もし植物が我々と話しができるとしたら、この植物たちは我々に何と何を言うのでしょうか？」そしてインタープリターは、植物が語るような調子で何を言いたいのか、どのように言いたいかを説明すると、きっとビジターの関心をよりひきつけることができる。
  - (3) 解説には最後のまとめも大切である。インタープリターはビジターの心に残るようなエンディングを用意しなければならない。終わりの話は一つの言葉であっても良いし、短い言葉や文章などでも良いが、比較的短い言葉の方が効果的である。
  - (4) 解説する際にスライドやその他、いろいろな機器を使用する可能性があるが、その際には早めに準備をし、機器をテストし、部屋の状況等を調べ、一番効果的に使用できるようセットする心がけも大切である。
- さらに、これらにつけ加えて注意すべきことは

- (1) まずは直接体験がベストであり、資源に直接触れさせることが重要である。  
インタープリテーションはインフォーマルな教育であることを記憶しておくべきである。
- (2) 利用者はまったくのボランティアの参加であり、自由意志での参加であることを忘れない。
- (3) 参加者は通常、満足できることを期待している。
- (4) インタープリテーションはインスピレーションなものであり、かつ動機づけられるものであって、単なる知識の提供であってはならない。
- (5) インタープリテーションはビジターの態度の変化、知識の増加、行動の変化をもたらすことを目的とする。
- (6) インタープリテーションは物理的行動そのものであるが、本質的な価値に基づくものであり、そこから感謝、理解、そして本質的な価値を保護する気持ちを啓発させるものでなければならない。

## 7. 日本のパークインタープリテーションの資格について

日本ではいまだインタープリターの資格制度がない。1992年に環境庁が検討会を開催した時にはインタープリターの資質として、1. ナチュラリストであること、2. プランナーであること、3. リーダー、オーガナイザーであること等の条件が挙げられた。これらはアメリカのインタープリターの資質や条件とかなりの違いがある。このインタープリター資格制度に関する検討会は、その後何回か開催されたのだが、けっきょくは資格制度の実現には到らなかった。なぜだろう。

一つには一般論としてむやみに資格をつくるのがよいことなのかという問題点が指摘されたことである。当時すでに多くの公益法人や財団法人がいろいろな資格制度を作って、それを組織運営の財源としている傾向が見られ、世間で問題化していたことである。二つ目としてどのような試験をパスすれば資格が与えられるかという資格の基

準の設け方の問題である。自然公園の基本的な法律の知識を条件の中に入れるのか、動植物、生態学の知識は必要なのか、受験資格に年齢制限を設けるのか等を考えてみると、かならずしもこれらの試験に合格したからとて優れたインタープリターが担保できるわけでもない。むしろ自然公園の法律を知らなくとも、伝統的な知恵で上手に自然の管理をしてきている地元の人も大勢いる。また、地元で長く住んでいるお年寄りの中には、その土地の伝統、文化、食生活等についてかなり詳しいインタープリテーションが出来る人もいるはずで、このような人たちは、自然や法律の知識がないからとか、年齢が高すぎるからと資格から排除してしまうべきなのだろうか。また北は北海道から南は沖縄まですべての動植物や生息地の知識を持っていないとインタープリターにはなれないのか。ある一定の地域を拠点にインタープリテーションをするのであれば、インタープリテーションができるその地域の知識で充分なのではないか。それにインタープリターは単なる知識だけの伝達でないとすると、知識とは違う資格を審査する必要があるのではないだろうか。それはビジターに対する心配り、気遣い、思いやり等の要素が入ってくるだろう、そしてそれはどのように審査することができるのだろうか等、インタープリターの資質と言うのは、通常の資格試験とは異なる要素がたくさんあって難しいとの結論からいったん棚上げになってしまったのである。

現在では、日本インタープリテーション協会や清里にあるキープ協会、自然教育研究センター等がインタープリターを目指す人たち向けのトレーニングセミナーを開催したり、経験を積む為のOn the Job Trainingの場も自然公園等で提供している。また、有限会社自然計画は大学等に講師を派遣して、インタープリテーションの実習授業を国立公園で行っている。また、上記のインタープリテーション関連で働いていた専門家が現在では大学の常勤講師としてインタープリテーションの授業と研究を進めている例もある。江戸川大学の現代社会学科ではすでに10年以上前から「インタープリテーション論」の授業科目を設け、平

成 26 年度からは海外のインタープリテーションについて学ぶ「インタープリテーション上級論」の授業も新設開講し、大学でのインタープリテーション教育の先駆けといえよう。

また、それらの協会やセンター等のインタープリテーションの方法には基本の概念や考え方は同じでも、それぞれのプログラムの材料の使い方や内容の組み立て方、実践の仕方や間合いの作法等に多少の違いがみられる。そういう点から、日本のインタープリテーションには統一したスタイルがあるのではなく、日本の茶道や生け花等のような流派の違いを感じるのである。したがって、これからインタープリターを目指したい人はどの流派のインタープリテーションを学ぶかを考えて、それらの異なる流派のインタープリテーションプログラムに参加しながら自分にあった流派を選んでプロフェッショナルになる道を精進すべきであろう。

## おわりに

アメリカにおけるインタープリテーションはコミュニケーションの一種であり、そのコミュニケーションの取り方には独特の作法がありそうである。見えるものから、言葉の背景にあるみえないものを察し、そこに秘められたメッセージを感覚としてとらえ、そこにある普遍的な価値を見出していくという考え方は、なにか東洋の思想や仏教の思想と類似のにおいを感じないだろうか？

こういったアメリカのインタープリテーションプログラムの政策の変遷をたどっていくと、どうやら政策の中心にいた公園局の職員の思想と関係があることがわかる。すなわち、1980 年以降、インタープリテーションの基本とも言われる“tangible to non-tangible”の考え方を普及させてきたアメリカ公園局のビジターサービスの担当者たちは、アメリカの新環境運動が起こってきた 60 年代には高校生であり、60 年代後半のベトナム戦争の時に大学生としてアメリカのベトナム戦争に反対し、アメリカの主流の価値観に抵抗し、東洋の思想に憧れたヒッピーやフラワートレ

ンといった世代の若者たちだったのである。アメリカの金銭的な豊かさや消費社会のライフスタイルといった価値観に疑問を呈しながら大学生活を送った人たちが多かった。まさにレイチェル・カーソンの「沈黙の春」(Carson 1962)、シューマッハーの「スモール イズ ビューティフル」(Shumacher 1973)、バリー・コモナーの「クロージング サークル」(Commoner 1972)等の生態学的に環境を認識する本が次々に出版され、そういう影響を受けた彼らが、インタープリテーションプログラムの政策立案の中心になっていくにつれて、アメリカのインタープリテーションプログラムの考え方も彼らの思想を反映するものへと変化してきたのである。その結果、環境教育の色が強くなっていくと同時にその理解の仕方に仏教的要素や東洋的なコミュニケーションの手法が入ってきたのである。もちろん、1990 年代というのは世界的に環境運動の関心が高まり、1992 年のブラジルサミットではアジェンダ 21 に多くの環境宣言が盛り込まれており、各国環境の意識に対するギアチェンジを余儀なくされ、そういった外的要因も強く働いていることは間違いない。

このような解釈をするならば、アメリカのインタープリテーションという職業技術は実は日本人にとっては得意とするコミュニケーションスキルといえるのではないだろうか。多くを語らずして心情を察する心、メッセージの奥の真実を読み取る心、そして語らずして察する心など、フリーマン・ティルデンの説くインタープリテーションの極意とはまさに東洋のコミュニケーションの一手法と言い切ることもできるのではないか。ティルデンは特にラルフ・ウォルド・エマソンやヘンリー・デービッド・ソロー等のトランセンデンタリズムの影響を受けたとされているが、そのエマソンの思想は実はペルシャ、インド、中国の古代思想にその出発点があったと言われており、巡り巡ってアメリカの国立公園のインタープリテーションの思想として広がった。そういった観点からも、インタープリテーションの思想といい、そのコミュニケーションのスキルといい、かなり東洋的な影響を受けていると言えるのではないだろうか。

日本におけるインタープリテーションの歴史は浅いが、その技術は実はすでに昔から使われてきたコミュニケーションツールであり、それを国立公園の自然保護思想の普及にどう役立てるかが今後の日本におけるインタープリテーション発展に考えるべき事柄なのではないだろうか。

#### 参考文献

- 親泊素子, 1998 アメリカ国立公園ビジターサービス職員 12 名にインタビューを実施し, 1999 年の夏に 2 ヶ月間, バイリンガル学生による調査を実施した。
- 親泊素子, 1998. 「インタープリテーションについて」財団法人尾瀬保護財団編『日光国立公園尾瀬地域利用者指導用マニュアル「改訂版」』財団法人尾瀬保護財団 VI-1-12.
- 親泊素子, 2007. 「インタープリテーションってなあに?」江戸川大学現代社会学科編『19 歳のライフデザイン』春風社, 172-171.
- Arning, C., 1998. Chuck Arning は 1997 年にティルデン賞を受賞したアメリカ国立公園局のパークレンジャーであり, 彼が解説するプログラムに参加し, インタビューを行った結果をまとめたものである。
- Beck, L., & Cable, T. 1998. Interpretation for the 21st Century. Champaign, IL: Sagamore Publishing.
- Carson, R., 1962. Silent Spring, Boston MA, Houghton Mifflin Co., 368pp.
- Cherem, G.J., 1991. Community Interpretation: the Key to appropriate tourism. Raymond S. Tabata and al. ed. Proceedings of the Heritage Interpretation International Third Global Congress, 60-64.
- Commoner, B., 1972. Closing Circle. New York, N.Y.: Bantam Books, Inc., 343pp.
- Donaldson, D., 1998. ドナルドソンはアメリカ国立公園局のビジターサービスの責任者で 1998 年 1 月 6 日に公園局オフィスでインタビュー。
- Fudge, R.B., 1998. ファッジはインタープリテーションスペシャリストとして, ワシントン D.C. 公園局に勤務。1998 年 1 月 6 日に公園局オフィスでインタビュー
- Ham, S. 1992. Environmental Interpretation: A practical guide for people with big ideas and small budgets. Golden, CO: North American Press.
- Lewis, W.J., 1980. Interpreting for Park Visitors. Philadelphia, PA: Eastern Acorn Press.
- Mackintosh, Barry, 1986. Interpretation in the National Park Service: A Historical Perspective. Washington, D.C.: U.S. Department of the Interior.
- 2014 年 10 月 10 日取得. [http://www.cr.nps.gov/history/online\\_books/mackintosh2/origins](http://www.cr.nps.gov/history/online_books/mackintosh2/origins).
- Shumacher, E.F., 1973. Small is Beautiful: Economics as if People Mattered. London: Blond & Briggs Ltd., 352pp.
- Shankland, R., 1954. Steve Mother of the National Parks. New York: Alfred A. Knopf Publishing, Inc.
- Sharpe G.W. (ed), 1982. Interpreting the Environment. New York, N.Y.: John Wiley & Sons Inc., 710pp.
- Tilden, F., 1957. Interpreting Our Heritage. Chapel Hill, NC: The University of North Carolina Press.
- U.S. National Park Service, 2007. Foundations of Interpretation: Curriculum Content Narrative, Interpretive Development Program: Professional Standards for Learning and Performance, 1-24.